



## 5. どのように使うの？—成川式土器を使った人びと—



### 鹿児島大学構内に眠る遺跡

寒川朋枝

鹿児島大学構内では、郡元キャンパス・桜ヶ丘キャンパス・唐湊学生寮・農学部付属入来牧場で遺物や遺構が確認されており、それらは、鹿児島大学構内遺跡と呼ばれている。主な遺跡は桜ヶ丘キャンパスと郡元キャンパスで確認されており、後期旧石器時代から近代にわたる様々な時代の複合遺跡であることが知られている。



写真1 旧河川より出土した多数の土器

鹿児島大学構内で初めて遺跡の存在が確認されたのは、1951（昭和26）年に河口貞徳氏により行われた教育学部運動場での発掘調査であり、古墳時代の住居跡が発掘された。その後、鹿児島県教育委員会、鹿児島大学法文学部考古学研究室により発掘調査が行われてきた。1985年には、埋蔵文化財の保護・活用と学内施設整備を円滑に進めるため、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター（2012年に鹿児島大学埋蔵文化財調査室から改称）が設置され、それ以降現在までに59件の発掘調査が行われている。

#### 鹿児島大学構内遺跡の古墳時代集落

これまでの発掘調査の結果、鹿児島大学郡元キャンパス内は、主に弥生時代から古墳時代の集落遺跡であることが判明している。遺跡の特徴としては、郡元キャンパス内を東西方向に流れる河川とそこから出土する多数の成川式土器（写真1）や水利施設、河川近くに営まれた水田跡、そして微高地に営まれた住居跡群などが確認されている。郡元キャンパスは、当時の南九州の人々により営まれていた集落の景観や土地利用の様子をうかがうことができる南九州の代表的な遺跡となっている。

図1は、郡元キャンパス内の弥生時代から古墳時代にかけての遺跡立地を示したものである。

弥生時代の遺構としては、農学部1号館中庭で、弥生時代中期の遺物を包含する住居跡1軒（居住域①）が検出されている。また、弥生時代中期該当の水田跡A・Bが工学部と教育学部にて検出されており、水田の痕跡としては、溝状遺構や稲株跡、足跡のほか、プラントオパール分析により多数のイネプラントオパールが検出されている。そして、郡元キャンパス中央部には幅約50mの河川が東西方向に流れていたことが発掘調査から判明しており、産学官連携推進センター建設地では、河川跡の底から弥生時代後期と思われる合掌型の井堰跡いせきも出土している。また、近接



写真2 旧河川内出土木杭類



写真3 旧河川内出土木製品

する地域共同センター出土木製品・木杭類（写真2・3、藤田ほか1999）や、やや東側の理学部1号館にあたる釘田第一地点の河川跡から出土している木杭類や木製品類の樹種同定を行った結果（能城2014）、クリが圧倒的に優占しており、クスノキ科・エゴノキ属・エノキ属等がみられた。この状況は北部九州に比べても特異な状況であり、クリが遺跡周辺で管理され木材が利用されていた可能性が指摘されている。鹿児島大学構内遺跡では、弥生時代より、河川を利用するため森林資源を管理・利用し、水を引いて水田を営み、微高地では住居を構えていたことがわかる。

そして、古墳時代に入ると人々の活動はさらに活発になり、居住域は大きく3つのエリアで確認され（居住域②・③・④）、古墳時代後半期には集落規模も拡大する。居住域③では住居跡3軒、居住域④では住居跡10軒やピット群・溝跡等が確認されているが、特に居住域②エリアは、笹貫式土器を主体とする6世紀代古墳時代後半期の住居跡密集地である。そして居住域②エリアの北側には水田跡と河川跡も同時に検出されており、河川のほとりに営まれた古墳時代のムラの景観を示す重要なエリアであり、本地点の状況を中心に詳細を述べる（図2参照、中村ほか2003・寒川2013）。

居住域②エリアの理学部から法文学部北側にかけては、約300軒

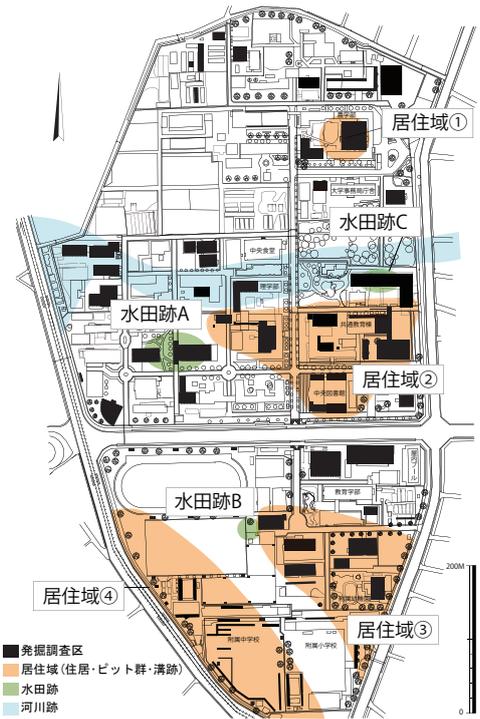


図1 鹿児島大学構内遺跡における弥生～古墳時代の遺跡立地

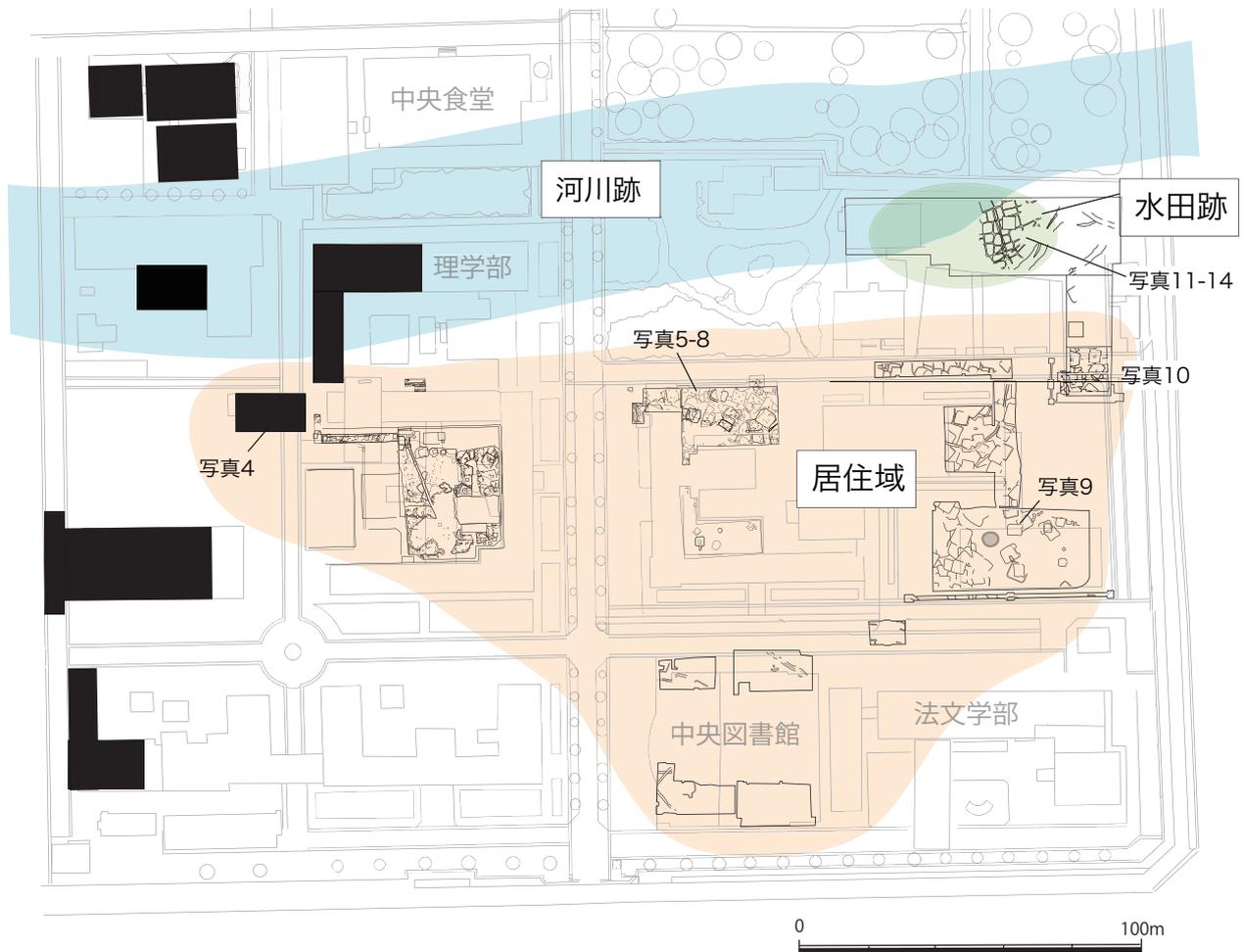


図2 居住域②・水田エリア周辺図



写真4 理学部3号館 遺構検出状況



写真5 稲盛アカデミー建設地  
SK103・107 住居検出状況



写真6 稲盛アカデミー建設地  
SK71 住居検出状況



写真7 稲盛アカデミー建設地  
SK99 住居 床面炉・遺物出土状況



写真8 稲盛アカデミー建設地  
SK132 住居 埋設炉検出断面



写真9 総合研究棟住居遺物出土状況  
(左は埋土内、右は床面白砂)



写真10 学習交流プラザ建設地  
SK33 住居床面・礫検出状況



写真 11 水田面 検出状況



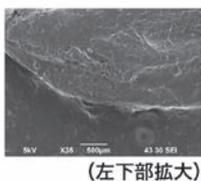
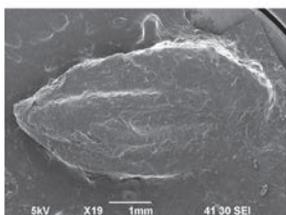
写真 12 水田面完掘、小畦検出状況



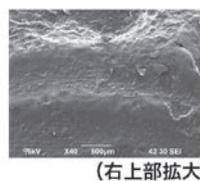
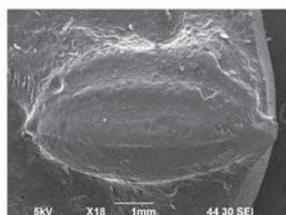
写真 13 水田面 足跡検出状況



写真 14 溝完掘、盛土遺構検出状況



(左下部拡大)



(右上部拡大)

写真 15 鹿大構内遺跡出土篋貫式土器に残されたイネ圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真 (真邊・寒川 2011)

近くの住居が密集し、同じ場所に重複して建て替えられた状態で検出されている (写真 4・5)。鹿児島大学構内遺跡における古墳時代の住居の特徴としては、形は方形のものが多く、床面には細かい白い砂が敷かれていたり、中央もしくは壁際に炉が配置されるものがある (写真 5～8)。住居によっては、床面の白砂や炭の層が何枚か確認される場合があり、何度か床面を敷き直している様子もうかがえる。炉の中央部には土器 (甕や壺の下半部や、高坏の坏部など) を埋設していることがあり (写真 6～8)、土器内部に炭が詰まった状態で検出される事例もある。住居内からは遺物が出土することが多く、住居内埋土に廃棄されたように出土するパターンが多いが (写真 9)、床面上に意図的に置かれたように土器や礫が出土する事例がある。居住域②エリアでは、5軒の古墳時代後期住居床面より、礫が4～8個ほどまとまって出土している。明確な用途は不明であるが、形状や重さ等のサイズが似たものが集められて床面に置かれた状態であり (写真 10)、当時の人たちが何らかの意図を持って選別した礫を住居内に持ち込んでいることがうかがえる (寒川 2015)。そのほかの出土遺物は、須恵器や土師器、石器 (石包丁・台石ほか)、紡錘車、土錘、玉類、鉄器、小型の青銅製品、金銅製品、軽石製品などもみられる。また、中央図書館や稲盛アカデミー建設地、学習交流プラザ建設地において溝状遺構が検出されている。これらの溝は、集落の境界にあたる可能性も考えられ、大きい溝内には多量の土器が廃棄されることがある。

また、河川跡南側には、1辺約3mの小畦によって区切られた水田が検出されており (水田跡C、写真 11・12)、これは小畦によって区切られた一枚の水田の大きさが分かる貴重な事例である。その東側には大畦と想定される盛土と溝も検出されている。また、土壌のプラントオパール分析の結果でも多くのイネプラントオパールが検出されており、水田層であることが裏付けられているほか、ムギ類の栽培の可能性も指摘されている (株式

会社古環境研究所 2014)。この水田層は、河川の氾濫によると思われる白い細砂をかぶった状態で検出され、水田面に残された当時の人々の足跡にもこの氾濫砂が堆積していた（写真 13）。水田層は上下 2 枚検出されたが、整地された痕跡も認められ、氾濫で砂をかぶった後に何度か水田を作り替えている様子をうかがうことができる。また、下の水田層の面では、大溝が検出された（写真 14）。この大溝の西側には、川砂や地山の粗砂が混ざった土層が確認され、川岸に溝を掘り、さらに盛土を行っていることが判明した。盛土の南側は、河川氾濫細砂が堆積しており、河川氾濫により盛土が壊されている状況が認められる。当時の人々が、水田を営むために河川を利用しようとして川岸では土木工事をを行い、土地利用の工夫を重ねていた様子がうかがえる。

また、居住域②エリアの住居内埋土については、一部をサンプリングして乾燥・洗浄を行い、土壤内に含まれる微小遺物を検出するというウォーター・フローテーション分析と、土器表面に残された植物片・昆虫類などの微小資料の痕跡をシリコンで型取りして同定・検証するという土器圧痕調査も併せて行っている。まだ分析途中であるが、現在までに得られている成果としては、植物はモモ種実、コミカンソウ属 79 点、イチイガシ 1 点、ツルマメ 1 点、イネ 16 点などが土壤内より検出されており、土器圧痕調査では、イネ圧痕やタデ科種子圧痕などが認められている（深川 2012、中村 2012、真邊ほか 2011）。古墳時代のイネ以外の食用植物で、他遺跡より検出されている一例としては、都城市黒土遺跡（栗畑 1994）や坂元 B 遺跡（栗畑 2006）ではアワの土器圧痕、宮崎県児湯郡川南町尾花 A 遺跡（松林ほか 2011）では古墳時代前～中期の住居内からアワ・ヒエ・エゴマ、堅果類、モモ類が検出され、鹿児島県南さつま市上水流遺跡（溝口ほか 2008）では古墳時代住居内よりイシミカワ近似種・モモ類、薩摩川内市楠元遺跡（川口ほか 2002）では溝状遺構出土壺の埋土より、シイ属・アカガシ亜属等の堅果類、ムギ類やヒョウタン類などが確認されている。当時の稲作を含む栽培植物の実態を解明するには、今後も地道なデータを積み重ねていく必要がある。

また、鹿児島大学構内遺跡古墳時代居住域②エリアの土壤分析の際には、動物骨片なども検出されており、樋泉岳二氏（早稲田大学）の同定によると、イノシシ・鳥類・ウサギのほか、カツオ・タイなどの魚類の骨も認められている。これは、古墳時代の人々が植物質食糧以外にも活発な食糧獲得活動を行っていたという具体的な一端を示している。

## 引用・参考文献

- 株式会社古環境研究所 2014「付編 1 鹿児島大学構内遺跡（2012 - 1: 郡元団地 H・I - 3 ~ 5 区 学習交流プラザ建設に伴う発掘調査）における植物珪酸体（プラント・オパール）分析」『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 28』 pp.40-47
- 川口雅之・山元真美子・東和幸ほか 2002『楠元・城下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 57 集
- 栗畑光博 1994『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書 第 28 集
- 栗畑光博 2006『坂元 A 遺跡・坂元 B 遺跡』都城市文化財調査報告書 第 71 集
- 寒川朋枝 2013「鹿児島大学構内遺跡郡元団地 H・I - 3 ~ 5 区（学習交流プラザ）調査概要報告」『平成 25 年度鹿児島県考古学会研究発表会』レジュメ
- 寒川朋枝 2015「住居内に持ち込まれた礫 - 主に古墳時代の事例について -」『Archaeology from the south III 本田道輝先生退職記念論文集』 pp.169-183
- 中村直子・新里貴之 2003「鹿児島大学構内遺跡郡元団地における古墳時代の様相」『九州前方後円墳研究会 2003 年度第 6 回大会 前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』 pp.322-327
- 中村直子 2012「大陸系穀物の流入を考える - 南九州の状況 -」『第 7 回九州古代種子研究会宮崎大会』
- 能城修一 2014「付編 2 釘田第 8 地点遺跡（郡元団地 H・I - 7・8 区）出土木材の樹種」『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 28』 pp.48-58
- 深川祐子 2012「鹿児島大学構内遺跡出土の種子資料と圧痕資料」『第 7 回九州古代種子研究会宮崎大会』
- 藤田晋輔・寺床勝也 1999「付編 2 出土木材の樹種鑑定に関する報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 13』 pp.64-71
- 松林豊樹・日高博司・結城修ほか 2011『尾花 A 遺跡 II 弥生時代以降編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 195 集
- 真邊彩・寒川朋枝 2011「付編 レプリカ法による釘田遺跡第一地点出土土器の圧痕調査」『鹿児島大学構内遺跡 釘田遺跡第一地点 鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書 第 6 集』 pp.148-150
- 溝口学・東郷克利・森雄二ほか 2008『上水流遺跡 2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 121 集